

あるがまゝの世界を、あるがまゝに見て行くことが出来れば、私達は不平をいふことはないだらう。かくあるべきものだ」と此方からきめてかゝるから、それにははないと不平にもなり、氣もいらだつ。さまざまの個人性をもつ子供等と生活してゐる時に、彼等を自分の思ふ型にはめようと思ふまへに先づ彼等の個人性におどろきたいと思ふ。私達は、児童心理の本をよんだり、研究をつんだりして、子供はかく取扱ふべきものといふ尺度をつくる。しかしその尺度は、完全なものとは誰がいふことが出来るだらうか。子供の生活そのものが事實である。この事實を措いて児童心理の研究も指導の方法もない。いつも謙遜な心持で、心眼をしばいに開いて、如何なる驚くべき事實が彼等の生活のうちにあるかを見たい。受取つて行きたい。昔話にあるプロクラステスの寢床の様に、自分の考へのうちにないやうな子供の性質は、おしげもなく之をすて願みず、自分のもつてゐる窮屈な尺度にたらないところがあると、こんな筈はない、かくあらねばならぬと、——子供一人一人には無比な生活そのものがあることもわすれて——之を子供に強いて大に教育の効果をあげるつもりでゐるやうなことがありやすい。何故私達は、もつと、ゆつたりとした心持で事實の中に生きてゆけないのだらう。きこちない心で、いつも教育者といふいかめしい鎧に身をかためて子供に對さなければならぬのだらうか。私達がいづつも人間らしく生きたいといふねがひにあふれて、その心そのまゝに子供にぶつかつて行くことが出来れば、如何に彼等が私達よりはるかに、人間らしく眞實に生きてゐるかといふことに驚くに相違ない。また、よし、好ましくない癖の子があつたとしても「いやな子だ」と批判するまへに、「この子は何にもしらずに生れて來たのに、わづか三年四年この世にある中にかくなつたのだ」といふ憂ふる心持でその子を包擁することが出来ればどんなによいだらう。私達は善いといひ、悪いといつて、すぐに篩にかけてしまはずに、何處までも、事實に忠實にぶつかつて行くのでなければいけない。主觀的の立場から見に行けば、子供の生はそこなはれる事も多からう。私達は眞實に生きたい。事實をどうなほさうとあせる

まへに、自分が何處迄忠實に事實を見てゐるかを考へたい。

月光の美しき夜、橋上に立つて、漣にくだける月影をみつめてゐる時、そのうづまく水の姿が刻々に變つてゐるにおどろく。海濱の砂上に坐して、旭光の美しさに見とれてゐる時、岸によせてはかへす波の姿、映する光のさまざまなおもむきにしみじみ瞬間の貴さといふ事を思ふ。「その瞬間が貴いのだ、またとくりかへされないその瞬間が。」と叫ばざるを得ない。

子供の生活を、ちつと見つめてゐると、この再びかへらぬ瞬間に、くりかへしをゆるさない真劍の生活をしてゐるその貴さを感じる。繪かきと同じ繪を二枚かいてくれといへば迷惑には相違ないがかいてくれる、しかし子供に「今の繪がお上手であつたから、この通りもう一枚。」とたのんでも、決して同じものはかけない。子供はたつた一度、たゞ一つのものに我の全體をうちこんで生活する。くりかへしは出来ない。よし、私達の眼には、幾日も同じことをして遊んでゐると思はれても、遊んでゐる子供自身は、決してくりかへしの生活ぢやない、隨性の生活ぢやない、刻々に新しい心で生きてゐる。私達は、瞬間を尊重しなければいけない。子供等は、昨日にも、明日にも生きない。今日に、今に生きる、此處に生きる、回顧とか豫想とかいふものはない。彼等はたゞ現在に生きるだけでもすることが澤山でやりきれないのである。

私達は、雨がふるといつてはつぶやく、風が吹くといつては愚痴をこぼす。けれども、子供等は、大自然のいろ／＼の現象を驚嘆の眼をひらいてうけとつてゐる。雨だれの音にあはせて歌をうたひ、水たまりにうつる自分の姿に話しかけては、打興じてゐる彼等の顔、風にとばされる木の葉を、自分が鬼ごつこの鬼になつたつもりで追ひかけまはし、うづまいてとぶ紙片を鳥とおもつてか息を凝してみつめてゐる子供の姿、實際彼等は、何がおこつてもつぶやく事をしらないで、たゞびつくりして見つめてゐる。此處にこそ眞實がある。感激の瞬間は誰でも偉人であるといふ言葉のやうに、子供といふこの偉人に對して、私達も彼等とつとも刻々に生き、その各瞬間を感激する。否、彼等が如何に真劍に生きてゐるかに感激することが出来るであらう。私達は、さぞ、毎日を生々どつかれることも、厭きることもなく彼等のうちに過すことが出来るであらう。